

報 告

小児がんで入院している子どもの父親が抱く
入院生活の中での関心事入江 亘¹⁾, 小川恵理子²⁾, 大川 智子²⁾
山本 光映²⁾, 塩飽 仁¹⁾, 小澤 美和³⁾

〔論文要旨〕

目的：小児がんで入院している子どもの父親が入院生活の中で抱く関心事を明らかにする。

対象と方法：小児がんの子どもをもつ父親4人が参加した、入院中の子どもの父親のための茶話会の逐語録に対して後ろ向き記録レビューを行い、内容分析によって入院生活の中で抱く父親の関心事を抽出した。

結果：父親が入院生活の中で抱く関心事は、すべての父親に語られた【母と子の入院生活】、【子どもや病気についての情報の把握】をはじめ、【仕事の調整と職場の理解】、【入院している子どもに会うこと】、【母親との考え方の違い】、【家族の中で父親としての役割を果たすこと】、【入院初期の自身の気持ちの整理】、【付き添い時の医療者とのコミュニケーション】の8要素で構成された。

考察：父親は、子どもの病気や生活に関する情報の取得に高い潜在的支援ニーズをもっていると考えられた。また、【家族の中で父親としての役割を果たすこと】、【仕事の調整と職場の理解】といった関心事に示されるように、家族にとって直接的な父親の役割と経済的に家族を支える父親の仕事の両立という、家族全体を俯瞰した捉え方をしていた。これらの関心事は、【入院している子どもに会うこと】と影響を及ぼし合っていると考えられた。

結論：家族内における自身の役割や行動、家族全体の情報のような父親が抱く関心事を汲んだ医療者の関わりは、父親の支援ニーズを捉えアプローチするための糸口となる。

Key words：小児がん, 父親, 入院, 関心事, 内容分析

I. 緒 言

小児がんの治療成績は大きく向上しているが、現在も小児期の病気による死因の1位であり¹⁾、小児がんの罹患は、子どものみならず家族にも大きな心理社会的影響をもたらす²⁾。小児がんを抱える子どもをもつ家族を対象とした研究からは、母親だけでなく父親も心的外傷後ストレス障害の高リスクにあることが報告されている^{3,4)}。

しかしその一方で、親を対象とした研究のほとんどが主な介護者・養育者であることの多い母親であり家族の中で父親に焦点を当てた報告は限られている⁵⁾。

加えて、父親の研究参加率は母親に比べて低く、さまざまなアプローチによって父親を対象とした研究を行う工夫の必要性⁶⁾が指摘されている。これまでの父親に関する報告においては、父親が子どもの入院加療においても主たる経済的役割を担い⁷⁾ながらも、さまざまな家族役割の変化を経験している⁸⁾ことや、子どものがん診断後にプラス思考に切り替える、明るく振る舞う、気丈さを演じるといった努力をとおして辛い状況に持ち堪えていたこと⁹⁾が明らかとなっている。このように、小児がんの子どもをもつ父親は、子どもの入院加療において母親とは異なった状況の中で対処しようとして取り組んでおり、父親には特有の支援ニーズが

Fathers' Concerns during Hospitalization of Their Children with Cancer

Wataru IRIE, Eriko OGAWA, Tomoko OKAWA, Michie YAMAMOTO, Hitoshi SHIWAKU, Miwa OZAWA

1) 東北大学大学院医学系研究科保健学専攻 (研究職)

2) 聖路加国際病院 (看護師)

3) 聖路加国際病院 (医師/小児科)

[3128]

受付 19. 4. 1

採用 19.10.25

備わっている可能性がある」と示唆される。しかし、いずれの研究においても、子どもの入院によって生じた状況に父親がどのように取り組んでいるのかに焦点が当たっており、現状の中で父親自身がどのような点に目を留め、どのような事柄に関心を寄せているのかはほとんど明らかにされていない。これらを明らかにすることは、父親が持つ潜在的な支援ニーズに呼応した形での、医療者からの支援の方略を示すうえで重要な示唆をもたらすと考えられる。

われわれは入院中の子どもの父親を対象とした茶話会（以下、父会）を継続的に行い、父親の潜在的な支援ニーズの把握と、父親との関係構築を目指して継続的に活動している。本研究では、父会に参加した父親の語りから得た逐語録から、入院中の父親の関心事を明らかにすることを目的とした。

II. 研究目的

小児がんで入院している子どもの父親が入院生活の中で抱く関心事を明らかにする。

III. 用語の定義

本研究に用いる「関心事」とは、「子どもの小児がんによる入院を契機に生じた、父親が気になって心配していること、注意を引かれていること、または心に引っかかるものや事柄」と操作的に定義した。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインは後ろ向き記録レビューである。

2. 父会の概要

父会は A 病院小児病棟内で年 2 回程度、土曜の午後約 1～1.5 時間の枠組みで行っている、小児がんや血液疾患で入院中の子どもの父親を対象とした茶話会である。医療者側の企画により開始され、2018 年 9 月までで計 10 回開催した。開催にあたっては、約 1 週間前に A 病院小児病棟に入院している子どもをもつ父親に調査概要および参加の自由について記載された父会の案内文書を配布している。父親が面会に来院せず、父会について直接説明できない際は、母親や祖母など父親以外の保護者に会の概要を説明し父親に案内文書を渡してもらうよう依頼した。会には家族支援チームの小児科医 1 名と小児病棟・外来に勤務する看

護師 2～3 名が毎回同席し、1 名がファシリテーター役を務めた。会は自己紹介・アイスブレイクを経て、第 1 回・第 2 回では自由な形で、第 3 回以降は話題のテーマを設定して開催している。父会で語られた父親からの要望や支援の中で着目すべき点については、参加した父親に同意を得たのちにスタッフ同士で共有し実践につなげた。

3. 研究対象

研究対象は計 4 人の小児がんの子どもをもつ父親が参加した、2013 年の第 1 回、第 2 回の父会の記録である。いずれの父親も約 1 週間前に A 病院小児病棟に入院している子どもをもつ父親に調査概要および参加の自由について記載された父会の案内文書を医療者あるいは父親以外の子どもの保護者を經由し配布し、当日は自由意思で参加した。この 2 回の父会では医療者から会のテーマを設定することはせず、「子どもの入院の中で考えていること・気になっていること」について自由に発言してもらった。第 1 回、第 2 回で挙げた内容を踏まえて、以降の父会では、医療者が父会で話し合うテーマを設定し、それを会の初めの契機として進めていく形としたことで父親の自発的な意見ではない内容となっていると考えられたため、本研究では医療者が設定した話題ではなく、父親が自由に気になっていることを話した 2 回分の記録を対象とした。なお、会の中で医療者側から父親に尋ねた内容（病棟内における入院中のほかの子どもや家族との父親の交流状況）に関する記録部分は本研究の分析対象から除外した。参加した父親の了承を得て、同席した看護師 1 名が逐語録を作成した。父会終了後に会の振り返りを行う中で、父会に参加した医療者全員で逐語録を確認し、全員の承諾をもって最終記録とした。

4. 調査期間

調査は 2014 年 5～11 月に行った。

5. 分析方法

分析は Berelson の内容分析法¹⁰⁾を用いた。まず、逐語録化されたデータを意味内容が区切れる単位ごとにコード化（[] で示す）した。次に、コード分類ごとに類似性を比較し、文脈内容を踏まえながらカテゴリー（【 】で示す）を命名した。カテゴリー抽出結果の確証性とカテゴリー名の妥当性を確保するため、

表1 参加時における家族背景

対象	父親の年齢	子どもの疾患	状況	調査時における子どもの発達段階・性別	家族形態	きょうだいの有無	仕事内容	母親の病院の付き添い
A	30歳代前半	急性骨髄性白血病	入院後3か月	4歳・男	核家族	あり	常勤職員	なし
B	40歳代後半	急性リンパ性白血病(再発)	再発入院後3か月 全入院期間は 1年6か月	7歳・男	核家族	あり	常勤職員	なし
C	30歳代後半	急性骨髄性白血病	入院後4か月	1歳・女	核家族	なし	常勤職員	なし
D	30歳代後半	横紋筋肉腫	入院後6か月 転院先から帰院後 1か月	1歳・女	核家族	なし	常勤職員	なし

8名の小児看護の臨床経験者、小児看護の研究者らによる合議を経てコードの分類、カテゴリー名を決定した。また、記録から参加者の属性を抽出した。最後に、抽出されたカテゴリーが参加した父親の一部にみられたのか、すべてにみられたのかについて確認した。

6. 倫理的配慮

本研究では、観察研究における、人体から採取された試料を用いない場合の匿名化された既存資料(逐語録)を研究対象としたことから、参加者への同意は、研究の実施についてA病院倫理委員会の承認(承認番号:14-R062)を得て、父会に参加した父親の研究参加の任意性を確保するために、同意撤回を表明できるよう研究情報をA病院ホームページ上に公開するオプトアウトにより行った。なお、父会は研究を目的に行っていなかったが、開始冒頭で会の目的と今後父会で話した内容について個人が特定されない形で研究に用いる可能性があることについては口頭で説明し、すべての参加者から了承を得た。父会はプライバシーの確保された空間で行った。分析に用いた逐語録は暗号化して管理し、分析の際はネットワークから切り離れた状態で行った。

V. 結果

1. 父会に参加した父親の属性

2回の父会で計4人の父親が参加した。父会開催時の子どもの年齢は1~7歳で男児2人、女児2人であった。子どもの診断は血液腫瘍3人、固形腫瘍1人で、このうち再発により入院していた子どもは1人であった。入院中の子どもにきょうだいがいたのは2人であった(表1)。

2. 入院生活における父親の関心事

分析の結果、逐語録の内容は63のコードに分割された。入院生活における父親の関心事の内容として、コード数順に【仕事の調整と職場の理解】、【母と子の入院生活】、【子どもや病気についての情報の把握】、【入院している子どもに会うこと】、【母親との考え方の違い】、【家族の中で父親としての役割を果たすこと】、【入院初期の自身の気持ちの整理】、【付き添い時の医療者とのコミュニケーション】の8要素が明らかになった(表2)。各要素について代表的な記述を用いて説明する。

【仕事の調整と職場の理解】は、子どもが小児がんの診断を受けたことでの家族の生活の変化に応じるため、職場への状況の理解を求めることや、仕事の内容や時間について相談しようとしていた12コードによって構成された。具体的なコードとしては[会社には病気のことを最初に1時間くらいたくさん話をした(A)]、[3~4年の入院生活で、仕事の環境が重要と感ずます(B)]、[組織が病気に対して理解があるかでだいぶ違う(B)]、[上司には話をして状況をわかってもらうようにしていたんで、うまく調整できました(D)]、[やっぱり生活をしていくためには仕事をしっかりとやらなければならない(D)]などが含まれた。

【母と子の入院生活】では、父親が不在の中での母親と子どもの入院生活の過ごし方や情報についての関心事として10コードによって構成された。[妻経由の情報は最初は慣れなかったが、今は特に気になりません(A)]、[些細なことはお母さんの方が長い時間来ているので知っているのは仕方ないですね(C)]、[細かいところは妻から聞いている状況(D)]、[この病

表2 小児がんで入院中の子どもをもつ父親の関心事

カテゴリー名	n	[代表的なコード (発言者)]
【仕事の調整と職場の理解】	12	[会社には病気のことを最初に1時間くらいたくさんのお話を話した(A)], [3～4年の入院生活で、仕事の環境が重要と感じます(B)], [組織が病気に対して理解があるかだいぶ違う(B)], [上司には話をして状況をわかしてもらおうようにしていたんで、うまく調整できました(D)], [やっぱり生活をしていくためには仕事をしっかりとやらなければならない(D)]
【母と子の入院生活】	10	[妻経由の情報は最初は慣れなかったが、今は特に気になりません(A)], [些細なことはお母さんの方が長い時間来てるので知っているのは仕方ないですね(C)], [細かいところは妻から聞いている状況(D)], [この病院は24時間付き添いじゃなくて母親は助かったと思います(D)]
【子どもや病気についての情報の把握】	10	[医療者の中でも聞くのは信頼のある人。人を選んで聞いています(A)], [治療に関しては医療者を信じています(A)], [統一した話をしてくれるといい(B)], [どうしても聞きたいときは遠慮せず医療者に聞いています(B)], [治療経過の把握が途中までになってしまう(C)], [もっと治療の経過が簡単なことであれば本を読んだりインターネットを見たりして理解できたかもしれない(が理解できないのでしない)(D)]
【入院している子どもに会うこと】	10	[病院に来たら(仕事は忘れて)子どもへ100%ですね(A)], [できれば毎日病院に来るように心がけています(C)], [実際に子どもの様子を見ると、やはり違います(D)], [平日は2,3日続けて面会に来れないこともあって、正直イライラするときもあります(D)], [土日は妻と相談しながら面会を調整しています(D)], [あとでこうしておけばよかったと思いたくない。だからなるべく子どもとも会いたいし、がんばってやっていきたい(D)]
【母親との考え方の違い】	7	[男性はストレスがあってもあまり話さない(A)], [男性は特に内にとため込む感じ(A)], [父親は母親よりドライ(B)], [男性は解決策を欲するのに対して、女性は共感することで対処していますよね(B)]
【家族の中で父親としての役割を果たすこと】	6	[自分は子どもがというよりも家族全体が経済面や精神面でも成り立つようにバランスを取っているような感じ(B)], [家族の背景はそれぞれ違うが、その都度やりとりしていれば、そのときは問題がなかったとしても、必要になったときにそれが役立つので・・・(家族それぞれとやりとりをしようとしている)(B)], [こういう状況で家族のためにがんばらない父親はいるのか。わからない(D)], [日中のことは妻に任せています(D)]
【入院初期の自身の気持ちの整理】	5	[これまでの3か月の入院生活はあっという間でした(A)], [最初は何が何だかわからなかった(A)], [A病院に来て1か月くらい。最初慣れるまでが大変でした(D)], [入院当初は子どものことばかりで、仕事に意識が向かないことも多かった(D)]
【付き添い時の医療者とのコミュニケーション】	3	[医療者に対してその都度思っていることはあるが今は大丈夫(A)], [たまの面会。誰に何を聞けばよいかかわかるとよい(B)], [単に居場所は椅子があれば。ベッドサイドに椅子が1つしかなくて・・・(B)]

院は24時間付き添いじゃなくて母親は助かったと思います(D)]などのコードによって構成された。

【子どもや病気についての情報の把握】では、タイムリーに情報を得られない中で、父親が子どもの状況を理解するための方法について考えていることを示す内容として10コードから抽出された。[医療者の中でも聞くのは信頼のある人。人を選んで聞いています(A)], [治療に関しては医療者を信じています(A)], [統一した話をしてくれるといい(B)], [どうしても聞きたいときは遠慮せず医療者に聞いています(B)], [治療経過の把握が途中までになってしまう(C)], [もっと治療の経過が簡単なことであれば本を読んだりインターネットを見たりして理解できたかもしれない(が理解できないのでしない)(D)], などのコー

ドが含まれていた。

【入院している子どもに会うこと】は、子どものことが気になり、会いに行く時間を捻出しようとする父親の思いとして10コードから抽出された。[病院に来たら(仕事は忘れて)子どもへ100%ですね(A)], [できれば毎日病院に来るように心がけています(C)], [実際に子どもの様子を見ると、やはり違います(D)], [平日は2,3日続けて面会に来れないこともあって、正直イライラするときもあります(D)], [土日は妻と相談しながら面会を調整しています(D)], [あとでこうしておけばよかったと思いたくない。だからなるべく子どもとも会いたいし、がんばってやっていきたい(D)]などで構成された。

【母親との考え方の違い】では、同じ親であっても、

表3 小児がんで入院中の子どもをもつ父親の関心事の
 カテゴリーと対象のカテゴリー分布

カテゴリー名	第1回			第2回
	A	B	C	D
【仕事の調整と職場の理解】	○	○		○
【母と子の入院生活】	○	○	○	○
【子どもや病気についての情報の把握】	○	○	○	○
【入院している子どもに会うこと】	○		○	○
【母親との考え方の違い】	○	○		
【家族の中で父親としての役割を果たすこと】		○		○
【入院初期の自身の気持ちの整理】	○			○
【付き添い時の医療者とのコミュニケーション】	○	○		

A～Dは、父会に参加した父親の記号である。各カテゴリー名に対して父親の語りがあったものには“○”をしている。

母親と父親で感じ方や考え方が異なることがあると感じている7コードをもとに示された。[男性はストレスがあってもあまり話さない (A)], [男性は特に内にとめ込む感じ (A)], [父親は母親よりドライ (B)], [男性は解決策を欲するのに対して, 女性は共感することで対処していますよね (B)] などで構成された。

【家族の中で父親としての役割を果たすこと】では、家族全体の視点から自身が何をやる必要があるかについて気に留めている様子として6コードから抽出された。[自分は子どもがというよりも家族全体が経済面や精神面でも成り立つようにバランスを取っているような感じ (B)], [こういう状況で家族のためにがんばらない父親はいるのか。わからない (D)], [家族の背景はそれぞれ違うが, その都度やりとりしていれば, そのときは問題がなかったとしても, 必要になったときにそれが役立つので・・・(家族それぞれとやりとりをしようとしている) (B)] によって構成された。

【入院初期の自身の気持ちの整理】は、父親が子どものがん診断に混乱し, 何が起きていたのかについて振り返る言動5コードから抽出された。[最初は何が何だかわからなかった (A)], [これまでの3か月の入院生活はあつという間でした (A)], [A病院に来て1か月くらい。最初慣れるまでが大変でした (D)], [入院当初は子どものことばかりで, 仕事に意識が向かないことも多かった (D)] といったコードによ

って構成された。

【付き添い時の医療者とのコミュニケーション】では、父親が子どもの付き添い時の対応に困惑しながらも, 誰に相談すればよいのかわからずにいる様子によって3コードから抽出された。[医療者に対してその都度思っていることはあるが今は大丈夫 (A)], [たまの面会。誰に何を聞けばよいかかわかるとよい (B)], [単に居場所は椅子があれば。ベッドサイドに椅子が1つしかなくて・・・(B)] で構成された。

3. 抽出されたカテゴリーの分布

抽出されたカテゴリーと4人の語りの分布について分析した(表3)。すべての親に共通した関心事は、【母と子の入院生活】、【子どもや病気についての情報の把握】であった。また、いずれのカテゴリーも複数の親の語りによって構成されていた。

VI. 考 察

本研究では、小児がんで入院している子どもの父親が入院生活の中で抱く関心事を、2回の父会の逐語録を分析することで明らかにしようと試みた。調査の結果、小児がんで入院している子どもをもつ父親の関心事は8つの要素によって構成され、【母と子の入院生活】、【子どもや病気についての情報の把握】は父親に共通した関心事として示された。また、父親は【家族の中で父親としての役割を果たすこと】、【仕事の調整と職場の理解】のように全体を俯瞰した捉え方をしていた。これらの関心事は【入院している子どもに会うこと】と影響を及ぼし合っていると考えられた。父親に共通する関心事と、父親の俯瞰した捉え方の2つの視点から考察していく。

第一に、本研究で明らかになった小児がんで入院している子どもをもつ父親の8つの要素からなる関心事において、【母と子の入院生活】と【子どもや病気についての情報の把握】は父会に参加した父親に共通して示された。

共通して抽出された要素はいずれも、来院することによって得られる情報であり、父親にとって得ることが難しいと思われる情報と考えられ、多くの父親が関心を寄せていることがうかがえた。スイスの小児がん経験者の親を対象とした情報ニーズに関する横断調査では、父親、母親のいずれも言葉による情報を最も望んでおり¹¹⁾、父親が病院に不在の際に母親と子どもが

どのように過ごしていたのか、子どもの現在の状態や病状、治療経過がどうなっているのかといったことについて、父親は直接的なコミュニケーションをとおした情報を求めていると考えられた。一方で、外来での母親を対象とした調査であるが、約40%の親は医療者の忙しさによって気楽に質問することが難しく、24%は質問することを躊躇していたといわれており¹²⁾、母親に比べ来院頻度が少ない父親は医療者への質問に、より躊躇しやすいことが推察される。そこで、父親が来院している際には、医療者から子どもの日常を伝えたり、大きなイベントがなくても、両親揃って治療経過や現在の状況を共有する面談を定期的に設定するなど、既に母親に情報を提供していた場合であっても、父親が来院している際には、医療者から治療経過や現在の状況について共有し、言葉をとおした情報の交流を意図的に行っていくことが父親への支援において重要と考えられた。入院生活に関する情報を多角的に父親が捉えられるような情報提供が求められる。

第二に、【家族の中で父親が果たす役割】や【仕事の調整と職場の理解】のカテゴリーに代表されるように、父親は、全体を俯瞰しながら自身の役割を果たそうとする視点を持っていた。これらの要素は、親として【入院している子どもに会うこと】と影響を及ぼし合っていると考えられた。

子どもが小児がん罹患すると、母親は就労を止め子どもに付き添う一方で、父親が経済的役割を担う構造をとりやすい⁷⁾。一方で父親は、子どものがん罹患によって養育役割の意識が高まるといわれている⁸⁾。こうした背景の中で父親の関心事として最も多くのコードから構成された【仕事の調整と職場の理解】は、父親が主たる経済的役割を担いながらも、【入院している子どもに会うこと】にも関心を持っており、子どもに会うための時間を調整しようと試みていることが語られた。子どもに会いに行く時間の捻出に苦慮している父親に対して職場が理解を示すことや、職場での良好な人間関係は小児がんの子どもをもつ父親にとっての精神的な支えや安寧にもなる^{9,13)}一方で、実態調査からは約4割の慢性疾患の子どもをもつ父親が就労調整上の困難を経験していた⁷⁾ことも明らかとなっている。したがって医療者は、子どもの診断の際の親の就労継続や就労時間の調整、職場の理解状況について関心を持ち、柔軟な面会時間への対応のような、仕事をしながら面会に来ている父親の状況を考慮した関わ

りが必要と考えられた。

また、【家族の中で父親が果たす役割】を考慮していた父親においては、仕事と家族の中での役割のバランスが容認できない状況から葛藤が生じていた。父親の医療者と接する機会が限られやすい家族様式や、他者への援助を求める行動をとりにくい生物学的特性¹⁴⁾を考慮しながら、父親としてどのような役割を果たしたいと考えているのかを捉えるため、医療者側から意図的にコミュニケーションをとる機会を持つ必要がある。例えば国内外の小児がんの子どもをもつ父親の先行研究からは、多くの役割がある中で母親を支えることに重点を置く¹⁵⁾、家族を養育する、あるいは保護する者として感情やストレスフルな状況を自分の内にとどめようとする¹⁶⁾といった父親の家族全体の中で自己の行動を導こうとする思考が示されている。加えて、父親の役割意識の存在はNICUに入院した子どもをもつ父親のレビュー¹⁷⁾からも捉えることができ、生命を脅かされる子どもの父親における重要なケアの視点として捉えることも必要と考えられた。一方で本研究からは、役割を果たそうとしながらも、同時に【母親との考え方の違い】を感じる契機ともなっており、家族間の認識のずれも合わせてアセスメントすることが望まれる。

他方、現代の日本の家族構造に視点を広げてみると、かつての男性が公領域（社会との接点や経済面）、女性が私領域（家族内の生活や養育面）を担うという分離した家族構造¹⁸⁾を主とした考え方から、多様な家族の働き方や養育のあり方が尊重、受容される考え方へと広がりを見せている¹⁹⁾。Okadaらの小児がんの子どもをもつ母親への調査においても、治療中において約3割の母親が家事以外の何らかの就労をしていると報告しており²⁰⁾、医療者は就労に関連した気がかりが父親だけでなく母親にも存在するという前提に立つ必要がある。

本研究によって小児がんで入院している子どもをもつ父親の関心事が網羅的に明らかになった。特に本研究では、父親同士が交流する場を設定し、さらにケアに携わる医療者にその場で要望を伝えることができる状況であった。これは先行研究で示されたアンケート調査⁸⁾や個別のインタビュー調査⁹⁾と異なる状況であり、具体的な父親の関心事を引き出すことにつながったと考えられた。一方で、先天性疾患の子どもをもつ親の先行研究では、家に残されたきょうだいの生活に

ついて憂慮している報告もある²¹⁾のに対して、本研究では同様の要素は抽出されなかった。疾患特性から考えて、心疾患のような慢性疾患の場合、疾患が今後存在する前提で家族機能を再構成するため、きょうだいを含めた再構成が初期から行われると考えられる一方、小児がんの場合は治療後に元の生活に戻るというイメージを抱きやすく、入院中にはきょうだいに目が届きにくい可能性がある。今後多様な状況にある対象を含めたさらなる調査が望まれる。

VII. 研究の限界

本研究の限界について述べる。第一に、本研究は、父会に参加した父親のみのデータから構成されており、子どもの入院中における父親の関心事の全容を網羅していない可能性がある。また、本研究では子どもが入院中である父親からの記録を取り上げており、より現状に即した内容が抽出できたと考えられる一方で、父親の語りは入院中の事柄に関する関心事に限定され将来に関する内容が含まれていないほか、会に医療者が同席したことや、ほかの父親の参加状況が語りの内容に影響を及ぼした可能性がある。さらに、参加した父親は入院してからの経過期間や子どもの診断、治療内容といった背景も異なるため、入院生活で生じる関心事が時期と関係なく抽出されている可能性がある。治療経過や治療の段階によって関心事の内容も変化していくと考えられることから、特定の時期の対象に尋ねるといった研究デザインによる検討も求められる。本研究の結果を踏まえ、父会では結果として抽出された要素を父会のテーマとして設定し、参加する父親が父会に参加することでどのような情報を得ることができるのかを明示するなど、会の内容についても検討を重ねているが、今後支援に対する評価も必要と考える。

VIII. 結 論

小児がんで入院中の子どもをもつ父親の関心事は、【仕事の調整と職場の理解】、【母と子の入院生活】、【子どもや病気についての情報の把握】、【入院している子どもに会うこと】、【母親との考え方の違い】、【家族の中で父親としての役割を果たすこと】、【入院初期の自身の気持ちの整理】、【付き添い時の医療者とのコミュニケーション】の8要素で構成された。特に【母と子の入院生活】、【子どもや病気についての情報の把握】

は父親に共通した関心事として示され、さらに【家族の中で父親としての役割を果たすこと】、【仕事の調整と職場の理解】といった全体を俯瞰する視点を持っていた。また、これらの要素は【入院している子どもに会うこと】と影響を及ぼし合っていると考えられた。結果に示されたような父親の関心事への視点を持って医療者が父親とのコミュニケーションを図ることは、父親の支援ニーズを捉えるための糸口となると示唆された。

本研究は第12回日本小児がん看護学会学術集会で口演発表した内容を一部改変したものである。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) National Cancer Institute Surveillance, Epidemiology, and End Results Program (SEER) (2014). "SEER cancer statistics review 1975-2013 childhood cancer by site incidence, survival and mortality" https://seer.cancer.gov/csr/1975_2013/results_merged/sect_28_childhood_cancer.pdf (平成31年2月13日アクセス)
- 2) Stuber ML, Kazak AE, Meeske K, et al. Is posttraumatic stress a viable model for understanding responses to childhood cancer?. Child Adolescent Psychiatric Clinics of North America 1998 ; 7 : 169-182.
- 3) 泉 真由子, 小澤美和, 細谷亮太, 他. 小児がん患児の両親の心理的問題 心的外傷後ストレス症状発症の予測因子の検討. 小児がん 2008 ; 45 (1) : 19-23.
- 4) Ozono S, Saeki T, Mantani T, et al. Factors related to posttraumatic stress in adolescent survivors of cancer and their parents. Support Care Cancer 2007 ; 15 : 309-317.
- 5) 下山京子. わが国における小児がん患児の家族への支援に関する文献的考察～近年10年間の文献分析から～. 小児保健研究 2011 ; 70 (1) : 68-75.
- 6) Clarke NE, McCarthy MC, Downie P, et al. Gender differences in the psychosocial experience of parents of children with cancer : a review of the literature. Psychooncology 2009 ; 18 (9) : 907-915.
- 7) 入江 亘, 塩飽 仁, 鈴木祐子, 他. 慢性疾患を抱える子どもをもつ親の就労実態および健康関連

- QOL (Quality of Life) との関連. 北日本看護学会誌 2018 ; 21 (1) : 1-11.
- 8) 橋爪永子, 杉本陽子. 小児がん患児の発症前後での父親の生活と役割意識の変化. 日本小児看護学会誌 2006 ; 15 (2) : 46-52.
- 9) 納富史恵, 兒玉尚子, 藤丸千尋. 小児がん患児の父親が困難な状況を受け止めていくプロセス. 日本小児看護学会誌 2010 ; 20 (3) : 59-66.
- 10) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 第2版. 東京: 医学書院, 2007.
- 11) Vetsch J, Rueegg CS, Gianinazzi ME, et al. Information needs in parents of long-term childhood cancer survivors. *Pediatr Blood Cancer* 2015 ; 62 : 859-66. doi : 10.1002/pbc.25418.
- 12) 筒井真優美. 外来受診した子どもの母親が医療者に情報を求める行動. 日本赤十字看護大学紀要 1996 ; 10 : 23-30.
- 13) 田邊美佐子, 神田清子. 小児がんの子どもと共に歩む父親の闘病体験. 高崎健康福祉大学紀要 2008 ; 7 : 13-23.
- 14) Tamres LK, Janicki D. Sex differences in coping behavior : a meta-analytic review and an examination of relative coping. *Pers Soc Psychol Rev* 2002 ; 6 : 2-30.
- 15) 上土居由佳, 久保田 晶, 小島綾子, 他. 幼児期の小児がん患児の父親役割～患者家族滞在施設で過ごした症例からの一考察～. 小児がん看護 2016 ; 11 : 44-51.
- 16) McGrath P, Chesler M. Fathers' perspectives on the treatment for pediatric hematology : extending the findings. *Issues Compr Pediatr Nurs* 2004 ; 27 : 39-61.
- 17) 岡 澄子, 野中淳子, 米山雅子. NICU に入院した子どもの父親の体験に関する文献検討. 日本小児看護学会誌 2017 ; 26 : 78-83.
- 18) 上原文子. 家族とジェンダー. 木村涼子, 伊田久美子, 熊安貴美子編. よくわかるジェンダー・スタディーズ. 京都: ミネルヴァ書房, 2013 : 76-77.
- 19) 副島堯史, 池田真理, キタ幸子. 現代の家族とその課題. 系統看護学講座 家族看護学. 東京: 医学書院, 2018 : 63-83.
- 20) Okada H, Maru M, Maeda R, et al. Impact of childhood cancer on maternal employment in Japan. *Cancer Nurs* 2015 ; 38 : 23-30. doi : 10.1097/NCC.000000000000123.
- 21) 赤松園子, 浅野みどり. 出生後に集中治療室へ緊急搬送された先天性疾患をもつ子どもの家族の体験. 日本小児看護学会誌 2012 ; 21 : 40-47.

[Summary]

Purpose : This retrospective study aimed to clarify fathers' concerns during hospitalization of their children with cancer.

Methods : On the basis of records of two tea parties for fathers of hospitalized children with cancer, the narratives of four fathers about their concerns on the hospitalization of their children were extracted and contents were analyzed.

Results : Fathers' concerns comprised the following eight categories : "how to spend a day with their child and mother in the hospital," "how to obtain information about their child's medical condition and treatment progress," "a degree of understanding their workplace and workload," "when to meet their child," "difference in perspectives with their mother," "role of being a father in the family," "what happened early in the hospitalization," and "how to behave when accompanying their child."

Discussion : Results indicated that fathers had a high potential need for information support regarding their children's disease and lives. Moreover, it appeared that the fathers' desire "to meet their child" as one of the parents influenced the disturbing sense derived from a bird's eye view of the whole family such as "a degree of understanding their workplace and workload" and "the role of being a father in the family."

Conclusion : Healthcare professionals should consider fathers' concerns about their role, behavior, and information to capture their needs and provide tailored approach to such needs.

[Key words]

childhood cancer, father, hospitalization, concern, content analysis